高橋虫麻呂の方法

―旋頭歌と短歌―

錦織浩文

一　序

「高橋虫麻呂歌集」所出の歌の多くは『萬葉集』巻九雑歌の部にまとめて収録されている。そのうちの大半は長歌が占めるけれども、その間を割くように、次のように旋頭歌一首と短歌二首とが並べて配置されている。

武蔵の小埼の沼の鴨を見て作る歌一首

①埼玉の小埼の沼に鴨ぞ羽きるおのが尾に降り置ける霜を払ふとにあらし　（一七四四）

那賀郡の曝井の歌一首

②三栗の那賀に向かへる曝井の絶えず通はむそこに妻もが　（一七四五）

手綱の浜の歌一首

③遠妻し多珂にありせば知らずとも手綱の浜の尋ね来なまし　（一七四六）

三首はともに東国の地名を詠み込んでいるという点で共通性をもつ。すなわち、①の歌は武蔵国埼玉郡埼玉（埼玉県行田市東南部）にあった「小埼の沼」にまつわる歌、②の歌は常陸国那賀郡（茨城県水戸市北方）の「曝井」にまつわる歌、③の歌は常陸国多珂郡（茨城県高萩市）の「手綱の浜」にまつわる歌である。虫麻呂は、ある時期、常陸国に赴任していたことが知られるけれども（9一七五三～四など）、これらの歌は、虫麻呂が実際にその地に赴き、その折の体験を基にしてうたった歌と推察される。

このうち、②と③の歌は比較的理解しやすい。意を通せばそれぞれ次のようになる。

②三つの実ができる栗の実の中、ではないが、那賀に向かっている曝井、その水が絶えないように、絶えず通いたい。そこに妻がいてくれればよいのに。

③遠くに住んでいる妻が多珂にいるのであれば、道はわからなくても、手綱の浜の名のように尋ねて来るのだけれど。

二首はともに、たくみに地名を詠み込みながら妻恋しさを表現した歌であり、地域性のみならず、内容の面においても関連のあ

ることが明らかである。一方、①の歌はどうかといえば、一見、鴨の生態をうたっているだけのようであり、内審の上では、②③の歌とは直接かかわらない歌のように見える。事実、一般には、①の歌と②③の歌との関連を見るような解釈はなされていない。が、その中にあって、①～③の三首の関連性を説いた、まことに興味深い考察がある。清原和義「虫麻呂風土」（美夫君志第四十三号、一九九一年、のちに『萬葉集の風土的研究』に収録）がそれである。

清原論文は、三首の「連作性」ということを、主として、①～③の三首における題詞の表記方法、風土の選択（いずれも水辺の景であること）の考察を通じて論じているのだけれども、その過程で、三首の主題に触れて次のように述べている。

ところで、三首に共通する一つの主題については、都離れた東国に於ける妻恋の意識ではなかったか。①の小埼沼の水しぶきを上げる鴨は、単に「鴨の羽に置く霜という発想」の妙によるものでもなく、「朝の沼の景」にひかれたばかりでもなく、悽愴亡妻挽歌（三六二五）に、

…鴨すらも　妻とたぐひて　わが尾には　霜な降りそと
白たへの　翼さし交へて　うち払ひ　さ寝とふものを…

の表現を見るように、鴨がひとり己が尾の翼霧る様子の背景に、雌雄むつまじく翼を交わす情景をも思い見るべきであろう。儀礼的な挨拶の歌とはいえ、曝井の辺に集まった女たちの華やぎの中に、我が妻の存在を願ったり、手綱の浜と聞いて、遠妻がそこにいるなら訪ねて来ようと、土地誉めの中にも都の妻を思う意識など、すべて都離れた人々の望郷の気持を代表するものにほかならない。

傍線部の見解は、まことに魅力に富む見解と思われる。①の歌の解釈はこの方向でなされるべきではあるまいか。さすれば、①の歌はいっそう味わい深い歌となり、妻恋しさをうたった歌として、②③の歌にまっすぐにつながる。

本論は、清原論文の見解に賛意を表しつつ、①の歌がもつ意味を今一度考えようとするものである。その上で、①～③の三首の関連性について、そして、三首がこの位置にまとめて配置されている理由について、私なりの考えを述べようと思う。

二　旋頭歌の解釈

①の歌は旋頭歌である。周知のとおり旋頭歌は、五七七・五七七の形式によってうたわれた歌で、『萬葉集』に六十二首を数える。その成立については種々議論されているけれども、これら旋頭歌に共通する特徴は、上三句で主題を提示し、下三句で説明する、という二段構造をもっているところに認められるとされている（品田悦一「人麻呂歌集旋頭歌における叙述の位相」萬葉第百四十九号、一九九四年を参照した）。このことを念頭において、①の歌の意味を考えてみる。

まず上句は「埼玉の小埼の沼で鴨が羽ばたきしている」という意である。題詞に「武蔵の小埼の沼の鴨を見て作る歌」とあることからすれば、この上句の内容は、実際目にした光景に基づくものと考えてよいであろう。すなわち虫麻呂は、上句において、実景を叙し、どこで、何が、どうしているのか、ということを端的に述べつつ、一首における主題を提示していると考えられる。これに対して下句は、「あれは、自分の尾に降り置いた霜を払おうとしているらしい」という意で、これが上句の内容に対する説明になっていると認められる。しかしながら、この下句が上句に対していかなる意味をもってかかわっているのかということになると、意外にむずかしい。

契沖『萬葉代匠記』（一六八七年）以来多くの注釈書は、この上句と下句との関係を理解するための補助として、『枕草子』の「鴨は羽の霜うち払ふらむと思ふにをかし」という一節をあげている。その上で、たとえば、鹿持雅澄『萬葉集古義』（一八二三年）は、「歌ノ意ハ此ノ小埼の沼にて、しきりに鴨が羽だゝきするよ、あれは己が大切にするその尾に、霜がおく故に、その霜をいとひて、はらふとにてあるらしとなり」といい、たとえば、佐佐木信綱『評釈萬葉集』（一九五〇年）は、「古へより、鴨はその羽におく霜を羽ばたきして払ふものと考へられてゐた」と述べている。いずれももっともな解説ではあるけれども、この上句と下句との関係については、作者の意図ということを含めて、もう一歩踏み込んだ解釈が必要ではなかろうか。一首における旋頭歌としての妙味が、このままでは浮かび上がってこないように思われる。

前掲清原論文が参考としてあげているとおり、①の歌の意味を考えるときに最も参考になるのは次の歌であろうと思われる。

古挽歌一首并せて短歌

夕されば葦辺に騒き　明け来れば沖になづさふ　鴨すらも妻とたぐひて　わが尾には霜な降りそと　白栲の羽さし交へて　うち払ひ寝といふものを　行く水の帰らぬごとく　吹く風の見えぬがごとく　跡もなき世の人にして　別れにし妹が着せてし　なれ衣袖片敷きて　ひとりかも寝む（15三六二五）

反歌一首

鶴が鳴き葦辺をさして飛び渡るあなたづたづしひとりさ寝れば　（三六二六）

右は、丹比大夫、亡き妻を悽愴する歌。

右は『萬葉集』巻十五に収録された遣新羅使歌群中の一首である。天平八年（七三六）に派遣された遣新羅使一行が安芸国の長門の島（広島県呉市倉橋島）に停泊した折に、つもる旅愁をなぐさめるために、かような「古挽歌」をうたったものと見られる。

この長歌に、「鴨すらも妻とたぐひて　わが尾には霜な降りそと　白栲の羽さし交へて　うち払ひ寝といふものを」とある。この部分は、一般に「鴨でさえ妻と一緒にいて、自分たちの尾に

は霜よ降るなと、白栲の羽をさし交わして、霜をうち払って共寝をするというのに」という意と理解されている（注1）。これによれば、当時、鴨は、自分たちの羽に霜が降りるのを避けるために雌雄お互いの羽をさし交わし、寄り添い合って寝るものと考えられていたことが知られる。

紀皇女の譬喩歌、

軽の池の浦み行きみる鴨すらに玉藻の上にひとり寝なくに　（3二九〇）

や、大伴家持の亡妾悲傷歌における、

我がやどに花ぞ咲きたる　そを見れど心もゆかず　はしきやし妹がありせば　水鴨なすふたり並び居　手折りても見せましものを…　（3四六六）

という表現は、具体的には鴨のこうした習性を背景にしていると見てよいであろう。

このことを踏まえて見れば、①の下句にうたわれている「おのが尾に降り置ける霜を払ふ」の意味するところがわかるように思われる。「おのが」という言葉は、「おのが身」（5八八六）、「おのが名」（6九四六）、「おのが妻」（10二〇〇五）、「おのが命」（12二八六八）というように、かならず自分自身の所有にかかる事柄をさす。「おのが尾に降り置ける霜を払ふ」――、自分自身の尾に降り置いた霜を払わなくてはならないということは、この鴨には互いに羽を交わす相手がいなかった、ということを意味するのではないか。もしこの鴨がつがいであったならば、互いに羽をさし交わして霜を避けたり、あるいは、互いの羽で霜を払ったりすることができるはずだからである。下句「おのが尾に降り置ける霜を払ふとにあらし」によって虫麻呂が表現しようとしたことは、つまり、「小埼の沼」で羽ばたきをしているあの鴨は、羽をさし交わす相手もなく一羽で夜を明かさなくてはならなかったらしい、ということではなかったか。

かくして一首は、上句において羽ばたきをする鴨の様子を提示し、下句においてそれが一羽で夜を明かした鴨の姿であるらしいということを説明する、そういう二段構造をもつ旋頭歌ではないかと思われる。であれば、一首における上句（主題）と下句（説明）との関係がよくわかり、上句から下句にいたるその展開の中に旋頭歌としての妙味を見出すことができるように思われる。

以上の考察を踏まえた上で一首の意を通すならば、次のようになる（注2）。

埼玉の小埼の沼で鴨が羽ばたきをしている。あれは、自分の尾に降り置いた霜を払おうとしているらしい（羽をさし交わす相手もなく、一羽でこの寒い夜を明かしたらしい）。

三　三首一組

①の歌が述べたような意をもってうたわれているとすれば、一首は、②③の歌と同様に、「都離れた東国に於ける妻恋の意識」

（前掲清原論文）に支えられた歌ということができる。つまり、①～③の三首は、歌体の類似性、地域の近接性に加えて、内容面での関連性が認められる。とすると、おのずと思い至るのは、①～③の三首はもともと三首一組で公表された一つの作品だったのではないか、ということである。

旋頭歌と短歌とを組み合わせて一つの作品として公表するという方法は、『萬葉集』中のほかの歌群にも認められる。たとえば次のような例がある（＊は、旋頭歌を示す）。

(1)　京職藤原大夫、大伴郎女に贈る歌三首

をとめらが玉櫛笥なる玉櫛の神さびけむも妹に会はずあれば

よく渡る人は年にもありといふをいつの間にぞも我が恋ひにける

むしぶすまなごやが下に伏せれども妹とし寝ねば肌し寒しも

大伴郎女、和する歌四首

佐保川の小石踏み渡りぬばたまの黒馬来る夜は年にもあらぬか

千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波やむ時もなし我が恋ふらくは

来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを

千鳥鳴く佐保の川門の瀬を広み打ち橋渡す汝が来と思へば

また大伴坂上郎女が歌一首

＊佐保川の岸のつかさの柴な刈りそねありつつも春し来たらば立ち隠るがね　（4五二二～九）

(2)　山上憶良、秋野の花を詠む歌二首

秋の野に咲きたる花をおよび折りかき数ふれば七種の花

＊萩の花尾花葛花なでしこが花おみなえしまた藤袴朝顔の花

（8一五三七～八）

(3)　備後国の水調郡の長井の浦に船泊りする日に作る歌三首

＊あをによし奈良の都に行く人もがも草枕旅行く船の泊まり告げむに

海原を八十島隠り来ぬれども奈良の都は忘れかねつも

帰るさに妹に見せむにわたつみの沖つ白玉拾ひて行かな

（15三六一二～四）

(4)　佐波の海中にしてたちまちに逆風に遭ひ、みなぎらふ浪に漂流す。経宿ののちに、幸くして順風を得、豐前国の下毛郡の分間の浦に到着す。ここに艱難を追ひて悲みし、悽惆しびて作る歌八首

大君の命畏み大船の行きのまにまに宿りするかも

右の一首は雪宅麻呂。

我妹子は早も来ぬかと待つらむを沖にや住まむ家づかずして

浦みより漕ぎ来し船を風早み沖つみ浦に宿りするかも

我妹子がいかに思へかぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる

海原の沖辺に燈し漁る火は明かして燈せ大和島見む

鴨じもの浮き寝をすれば蜷のわたか黒き髪に露ぞ置きにける

ひさかたの天照る月は見つれども我が思ふ妹に会はぬ頃かも
＊ぬばたまの夜渡る月は早も出でぬかも海原の八十島の上ゆ妹があたり見む

（15三六四四～五一）

(5)

海辺にして月を望みて作る歌九首

秋風は日に異に吹きぬ我妹子はいつとか我れを斎ひ待つらむ

大使の第二男。

神さぶる荒津の崎に寄する波間なくや妹に恋ひわたりなむ

右の一首は土師稲足。

風のむた寄せ来る波に漁りする海人娘子らが裳の裾濡れぬ
＊天の原ふりさけ見れば夜ぞ更けにけるよしゑやしひとり寝る
夜は明けば明けぬとも
わたつみの沖つ縄海苔来る時と妹が待つらむ月は経につつ
志賀の浦に漁りする海人明け来れば浦み漕ぐらし楫の音聞こゆ
妹を思ひ寐の寝らえぬに暁の朝霧ごもり雁がねぞなく
夕されば秋風寒し我妹子が解き洗ひ衣行きて早着む
我が旅は久しくあらしこの我が着る妹が衣の垢づく見れば

（15三六五九～六七）

(6)

越中国の歌四首

大野道は茂道茂路茂くとも君し通はば道は広けむ
＊渋谷の二上山に鷲ぞ子生むといふさしはにも君のみために鷲ぞ子生むといふ
弥彦のおのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そほ降る
弥彦の神の麓に今日らもか鹿の伏すらむかはごろも着て角つきながら

（16三八八一～四）

(7)

能登郡にして香島の津より舟を発し、熊来の村をさして往く時に作る歌二首

＊鳥総立て舟木伐るといふ能登の島山今日見れば木立茂しも幾代神びぞ
香島より熊来をさして漕ぐ舟の楫取る間なく都し思ほゆ

（17四〇二六～七）

(1)は、藤原麻呂と大伴坂上郎女との贈答歌で、その贈答の最後に旋頭歌が用いられている。(2)は、山上憶良の秋の七草の歌で、短歌と旋頭歌とによる二首一組。(3)～(5)は、いずれも遣新羅使歌群の中にあり、(3)は、備後国の長井の浦での作三首。その冒頭が旋頭歌である。(4)は、豊前国の分間の浦での作八首。その末尾に旋頭歌を置く。(5)は、筑前国博多湾の海浜での作九首。四首目の転換部に旋頭歌がある。(6)は、越中国の民謡四首で、前半二首が短歌と旋頭歌の組み合わせになっている（後半二首は短歌と仏足石歌の組み合わせ）。(7)は、天平二十年（七四八）越中国守大伴家持が出挙のために諸国を巡行した折の作で、旋頭歌と短歌とによる二首一組である。

これらの(1)～(7)の歌群中における旋頭歌の意義については、伊藤博『萬葉集の歌群と配列』下（第八章第三節「海辺にして月を望む歌九首」、第九章第二節「七草」、一九九二年）に詳細な考察がある。

旋頭歌形式は、本来、上三句（5 7 7）を甲が、下三句（5 7 7）を乙が唱って合せることから生じた詩型と思われ、人麻呂集歌などに四一首を集める前期万葉（いわゆる万葉第一・二期）においてすでに特殊な形式と見られていたと認められるから、短歌が普遍の詩型として確立されていた天平の世においては、ますます日常性とは無縁な古めかしい詩型と考えられていたことが明らかである。かような詩型を、普遍の短歌群の中に据えたりそれと合せ用いたりすれば、歌の流れ（起伏・展開）に変化の妙を賦与するのに大いに効果があったはずだ。事実、先に指摘した(1)～(7)の例は、大部分が口誦の場で用いられ、固有の存在意義を発揮している。

こうした観点から伊藤論文は、それぞれの歌群において旋頭歌が果たしている役割を具体的に説き、そして、天平の時代にあって、旋頭歌と短歌とを組み合わせてうたう方法が、「時代の一つの詠法」として確立していたということを明らかにしている。

虫麻呂は、この「時代の一つの詠法」というべき方法を、いちはやく用いた歌人の一人ではなかったか。すなわち、旋頭歌一首と短歌二首とを組み合わせ、たとえば宴の席などで、この三首をまとめて公表したのではあるまいか。

①～③の三首は、いずれも妻恋しさということを主題にしていると考えられ、故郷を離れた人々が集う宴の席などで公表する歌として、まことにふさわしい内容をもっている。この場合、①の旋頭歌を冒頭に置くことは、なによりもまず、聞き手の注意を引き寄せる意味において効果を発揮するであろうと思われる。①の歌は、一見、実際に目にした鴨の生態をそのままうたっているだけのような印象を受ける。しかし、一首は、上句から下句にいたる展開の中において、寒々とした朝にひとり羽きる鴨の姿を印象的に浮かび上がらせている。その鴨の姿は、虫麻呂をはじめ、故郷を離れて東国にある人々（聞き手）の姿におのずと重なってくるにちがいない。聞き手の関心を高めるという意味においては、この歌は、②③の歌よりも数段まさるといえるのではなかろうか（注3）。

かくして①～③の歌は、もともと東国における宴の席などで公表された三首一組の作品で、そして、その公表時の順序のままに「虫麻呂歌集」に収録され、さらには『萬葉集』巻九雑歌の部に収録されることになったのではないかと考えられる。とすれば、『萬葉集』巻九雑歌の部において、①～③の三首が、長歌群と長歌群との間にはさまれるようにして、今見る形で位置する当然の理由がわかる。この立場から、最後に、『萬葉集』巻九雑歌の部における「虫麻呂歌集」所出歌の配列の問題について述べておき

たい。

四　結

はじめに述べたように、『萬葉集』巻九雑歌の部には「虫麻呂歌集」所出の歌がまとめて収録されており、①～③の歌はその中に含まれている。その配列の様相を具体的に記せば、次のようになる。

Ⅰ
- 1東国上総　長反歌　詠上総末珠名娘子一首并短歌
- 2畿内摂津　長反歌　詠水江浦嶋子一首并短歌
- 3畿内河内　長反歌　見河内大橋独去娘子歌一首并短歌
- ①東国武蔵　旋頭歌　見武蔵小崎沼鴨作歌一首
- ②東国常陸　短歌　那賀郡曝井歌一首
- ③東国常陸　短歌　手綱浜歌一首

Ⅱ
- ア畿内大和　長反歌　春三月諸卿大夫等下難波時歌二首并短歌
- イ畿内大和　長反歌　難波経宿明日還来之時歌一首并短歌
- ウ東国常陸　長反歌　検税使大伴卿登筑波山時歌一首并短歌
- エ東国常陸か　長反歌　詠霍公鳥一首并短歌
- オ東国常陸　長反歌　登筑波山歌一首并短歌
- カ東国常陸　長反歌　登筑波嶺為嬥歌会日作歌一首并短歌

右の歌々の配列基準については種々議論されている（この問の事情は「『虫麻呂歌集』の配列基準」岡山大学大学院文化科学研究科紀要第五号、一九九八年において述べた）。結論をいえば、本論は、伊藤博「歌群の配列―虫麻呂集歌をめぐって―」（文芸言語研究文芸篇11、一九八六年）の説に賛成である。すなわちこの部分は、基本的に季節という観点によって類聚されており、結果、Ⅰ季節を限定しない歌の部（1～③の六首）と、Ⅱ季節順に配列した部（ア～カの六首）との大きく二部にわかれていると見る。

このように見る場合に問題になるのは、季節を限定しない歌の部のⅠ中に、2の歌と①の歌とが入っていることである。というのは、2の歌には「春の日の霞める時に…」というように、そして①の歌には「降り置ける霜」というように、季節にかかわる表現が存在するからである。

この点について、伊藤論文は、2の歌における「春の日の霞める時に…」はあくまで歌の導入部であって、歌の本旨である浦島伝説自体は春という季節にかかわらないとし、①の歌の「霜」は必ずしも季節を限定しない素材であるとして、2の歌と①の歌とがⅠの中に入っていることに問題はないとしている。そして、Ⅰの内部は、長反歌（1～3）→旋頭歌（①）→短歌（②③）というように、歌の形式を第一基準にして配列されていると説いている。けれども次のように考えるならば、この問題はもっと簡単に解くことができるのではなかろうか。1～3は、伝説中の人物、

およびそれに準ずる特殊な人物を題材にした歌としてまとまっている。そして、①～③は、以上述べてきたとおり、妻恋しさということを主題とする歌としてまとまっている。はたして巻九編者は、「虫麻呂歌集」の歌々を季節順に配列するということを第一に企図しつつも、一方で、歌の内容によるまとまりということを尊重したのではなかったか。

巻九雑歌の「虫麻呂歌集」歌の編集手順をこのように捉えてよいのだとすれば、以上述べてきた①～③の歌について、その内部的な関連を最も早く読み取ったのは、ほかならぬ巻九編者であったということになる。これに加えて、旋頭歌→短歌の順で組み合わせて公表する詠法が、のちに遣新羅使歌群（15三六一二～四）や家持作歌（17四〇二六～七）において見られることを思うならば、虫麻呂の①～③の歌が後人に与えた影響は思いのほか大きかったのではあるまいか。虫麻呂の旋頭歌一首、短歌二首は、萬葉和歌史の一面を知る上でも、興味深い作品群ではないかと思われる。

（一九九七・一一・一五）

注

(1) 「わが尾には霜な降りそと」という「わが」は、文脈上ここは、複数と見なくてならない。これについては、『古典全集』（一九七二年）の頭注に、「我が尾には―このワはわれわれの意。雄は雌の、雌は雄の身を案じて、いたわり合っていることを表わす」とあるのが意を尽くしていると思われる。

(2) 下句に「降り置ける霜」とあることを重視するならば、一首は、秋か冬かの早朝の光景をうたっていると捉えられる。『萬葉集』において「霜」は、秋と冬とを代表する景物としてうたわれる傾向が顕著であり（秋の例は10二一三二・二一三五・二二〇三・二二二〇・二二三二など。冬の例は10二三三六、19四一一一など）、当時すでに、寒い季節に起きる自然現象として捉えられていたと考えられるからである。口語訳において「一羽でこの寒い夜を明かしたのであるらしい」という意を補ったのは、そうした理由に基づく。なお、いうまでもないことながら、上句の「埼玉の小埼の沼に鴨ぞ羽きる」からはうたわれている季節や時間のことなどは窺い知ることができない（「鴨」は季節を限定してうたわれる鳥ではない。3二五七〈春〉、4七一一〈秋〉、1六四〈冬〉参照）。とすると、下句は、上句の光景の季節と時間とを明かしていることになり、その点にも、この歌の旋頭歌としての妙味を認めることができるのかもしれない。

(3) 前に掲げた(1)～(7)の中にも、今の場合と同様に、旋頭歌を冒頭に置き短歌を続ける歌群がある。(3)と(7)とがそれである。いずれも、旋頭歌を冒頭に置くことによる効果を期待したものと思われるけれども、作歌時期ということでいえば、虫麻呂の例が最も早い。少なくとも、『萬葉集』において、虫麻呂の旋頭歌一首、短歌二首とによる組み合わせは、旋頭歌→短歌の順による詠法の先駆である。

（にしきおり　ひろふみ　岡山大学大学院文化科学研究科）